古典と現代

中央公論社

本書の座談会は、昭和四十七年四月から昭和四十八年三月までNHKテレビの教養特集して放映とされた「古典と現代」（制作　NHK大阪教育部）を素材として編集したものである。本書には、その前半（昭和四十七年四月―九月）の六篇を収録した。また、「解説」は各座談会の出席者によって執筆されたものである。

古典と現代

© 1974

昭和49年2月20日　初版印刷
昭和49年2月28日　初版発行

定価1250円

発行者　高梨　茂

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
本文図版製版　株式会社トープロ
口絵原色版印刷　株式会社トープロ
カバー印刷　株式会社トープロ
本文用紙　三菱製紙株式会社
製本　小泉製本株式会社
製図　吉川一子

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋2丁目1番地
電話561－5921（代）振替東京34

レイアウト／柴永文夫

落丁・乱丁本はお取替いたします

古典と現代

目次

太平記 ―― 意志的人間 …… 5
山崎 正和
桜井 好朗
司馬 遼太郎
陳 舜臣

南総里見八犬伝 ―― 文明への叛逆 …… 41
多田 道太郎
東 由多加

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山田　宗睦
松田　修

歎異抄――自我の超克……67
梅原　猛
笠原　芳光
寿岳　文章

平家物語――歴史と運命……103
西尾　幹二
村井　康彦
木下　順二

御伽草子――庶民願望の明暗……137
岡部　伊都子
佐竹　昭広
岩本　裕
杉浦　明平
小田切　秀雄

新古今和歌集――虚無の美学……167
笠原　芳光
塚本　邦雄
加藤　周一

解説

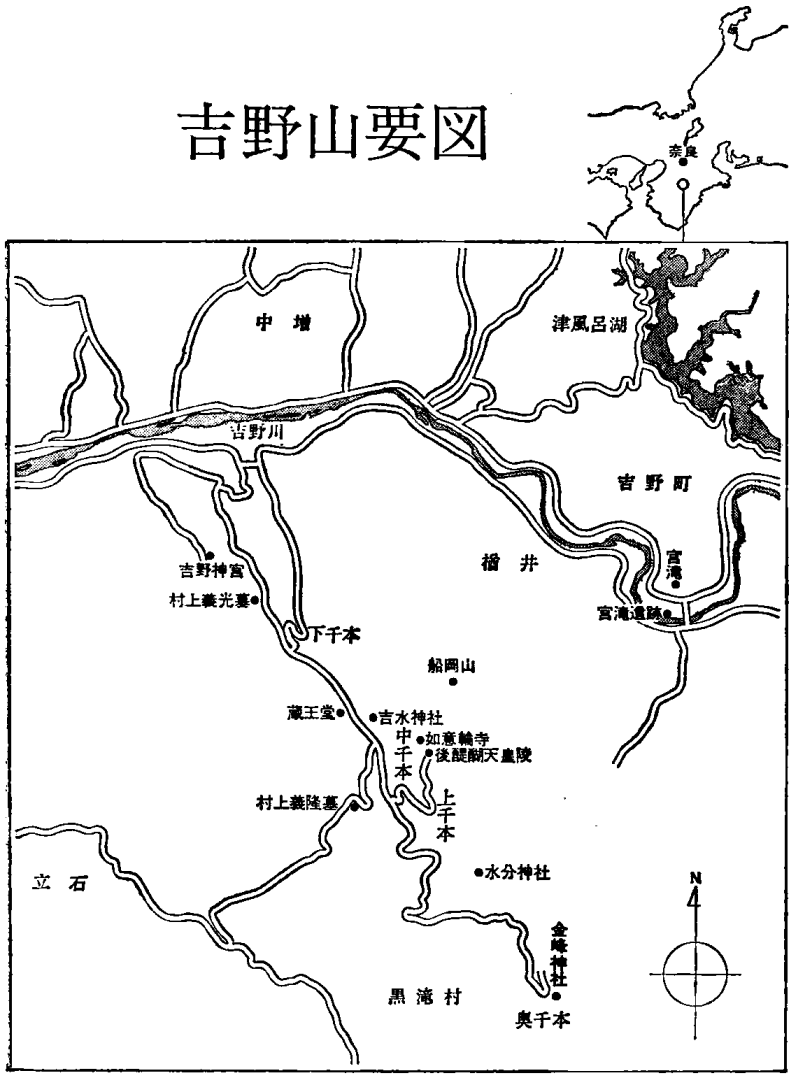
古典としての『太平記』　桜井　好朗……203
『八犬伝』における逆説的構造　松田　修……219
『歎異抄』と『マルコ福音書』　笠原　芳光……231
『平家物語』覚書　村井　康彦……241
『文正草子』再読　佐竹　昭広……255
隠岐本撩乱　塚本　邦雄……267

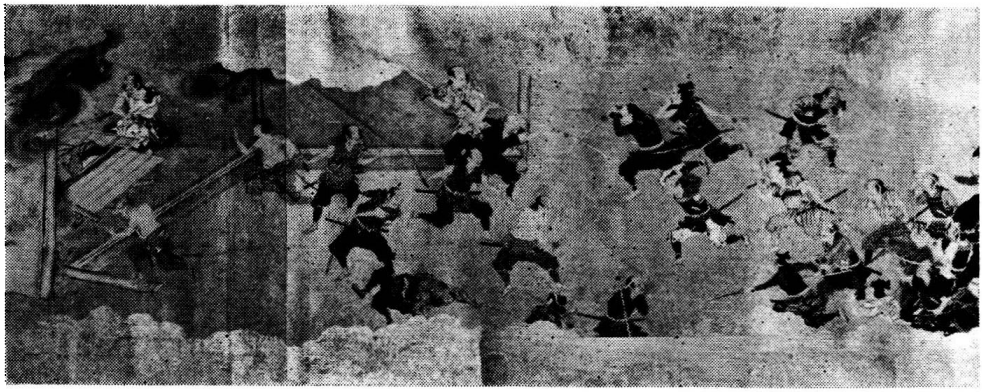
太平記

意志的人間

山崎　正和（評論家）
桜井　好朗（豊田工業高等専門学校助教授）
司馬　遼太郎（作家）
陳　舜臣（作家）

吉野山要図


奈良
中 増
津風呂湖
吉野川
吉 野 町
吉野神宮
村上義光墓
下千本
宮滝
宮滝遺跡
船岡山
蔵王堂
吉水神社
中千本
如意輪寺
後醍醐天皇陵
村上義隆墓
上千本
水分神社
立 石
金峰神社
黒 滝 村
奥千本
N

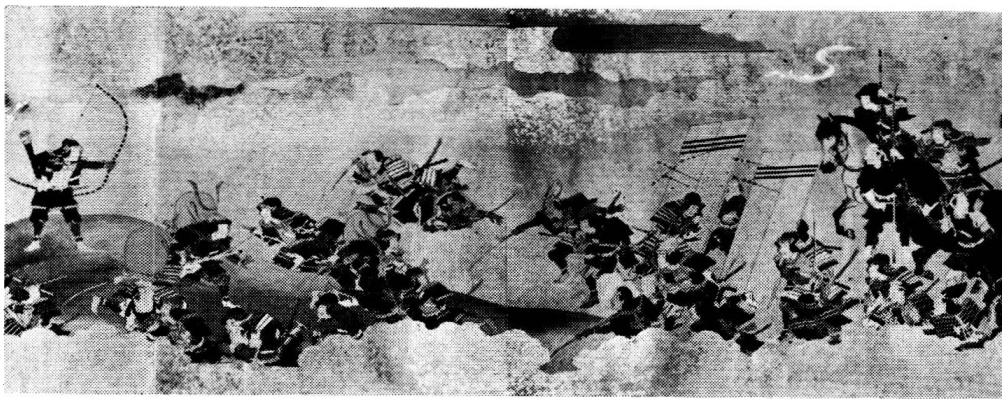


合戦（『太平記絵巻』三時知恩寺所蔵）

山崎　いったい私たちは、歴史というものをなんのために読むのかということを、ときどき考えることがあります。たしかに過去の事実から具体的な教訓を学んで、それを人生上の政治や戦術に応用するという読み方もあろうかと思われます。またもっと学問的に、人間の社会の構造を学んだり、あるいは歴史の法則というようなものを見つけ出して、それによって未来を占い、現実を認識するということに役立てる見方もあるには違いありません。

しかし私には、どうも歴史にはもう一つのより私的な読み方があるような気がして仕方がありません。というのは自分がなにか人生上の問題に追いつめられて、決意を下しかねているようなときに、過去の同じような状況にあった人が、どんなふうに生きたかを思い出し、その表情や姿勢とでもいうべきものを学びとる方法があるように思われます。すなわち故人の生き方の美的なスタイルというふうなものを、なんの目的もなく読んで、それによって自分を励ますということがあるような気がするわけです。いうまでもなく、それはなんら、具体的な知恵を借りてくるということではありません。暮夜ひそかに自分の進退について思い悩み、あるいはとり返しのつかぬ非運にたえかねているようなときに、かつて同じような状況にあった人の生きる姿をただ思い出す。歴史にはそれだけのつつましく、しかし切実な読み方があるのではないかと思うのです。

そういうことをふと感じたのは、数年前、まだ学生紛争というものが非常に激しかった時期に、たまたま『平家物語』に材料を得て、芝居を書いて上演したときでありました。それを見に来た私の友人たちは、それぞれみな大学で苦労していた教師たちなのでありますが、それが言いあわせたように芝居のなかの乱世の人物を、自分の学園のなかにいるさまざまな同僚の姿に引き比べて喜んでいたわけです。いいかえれば大学の紛争のなかで悩んだ自分の姿を、『平家物語』のなかの人物に仮託して意味づけていく――あるいはその



位置づけというものを考えて楽しんでいたのであります。もちろん芝居はなんの教訓もあたえてはくれませんが、人間は自分の人生のアナロジーを過去に見いだすだけで救われるものだということを、私はそのとき感じたのであります。

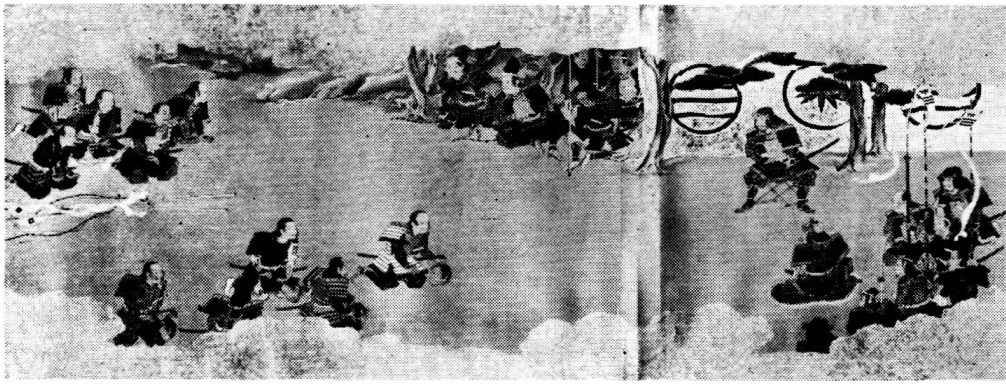
その後ある機会がありまして、私は『太平記』を現代の日本語に翻訳する仕事をあたえられました。それをやってみて、たいへん驚いたことには、この『太平記』というものが、あらためて、いま言ったような歴史の読み方、あるいは歴史観に貫かれているという印象がしたわけであります。作中にあらわれてくる人物は、すべてその背後に『平家物語』、あるいは中国の古典や歴史書の登場人物を背負って、それと重ね写しにされている。すべての人物が人生に思い悩むと、過去の人間、同じ境遇にある人間を思い出し、それと二重写しになりながら、自分の行動のスタイルを決定していくという感があるのです。たとえば後醍醐天皇が都落ちをされるときには、かつての玄宗皇帝の故事を思い出す。あるいは日野俊基が幕府に捕えられて東下りをするときには、平重衡のことを思い出す。

死地にひかれる旅を歌う道行文は、『太平記』の魅力の一つですが、それは必ず過去に同じように不幸な人が歩いた旅の跡を示しているのです。死にに行く人間は事実としては孤独なのですが、この記憶の重ね映しによって孤独ではない——。

なにか私は、乱世のなかにあって人間が生きる場合の歴史の意味、歴史の読み方の意味というふうなものを、この『太平記』を読んで、あらためて考えた次第であります。

延元元年（一三三六）の暮のある夜、今の京都御所にほど近い、ある荒れた屋敷の築地のくずれから二人の女房がしのび出た。すると、武士らしい身なりの男が馬をひいて近づき、一人の女房を馬にのせ、もう一人の女房から、何やら大切そうな品物をうけとると、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



南のほうさして、たちまち闇にまぎれて姿を消した。

この馬上の女房こそ、女装した後醍醐天皇であり、男が奉じていたものは三種の神器、目指すは吉野であった。

『太平記』は、この事件を、足利尊氏によって花山院に幽閉されていた後醍醐天皇の「芳野潜幸」として、さらに次のように述べている。

「白昼に南都を此如にて通らせ給はゞ、人の怪め申事もこそあれとて、主上をば怪げなる張輿に召替させ進て、供奉の上北面共（院を護衛する武士たち）を輿舁になし、三種の神器をば足付たる行器に入て（食物を盛って持ちはこぶ器に入れて）、物詣する人の破籠なんど入て持せたる様に見せて、景繁夫に成て（帝を馬にのせてつれだした男の名は景繁、それが人足になって）是を持つ。何れも皆習はぬ態なれば、急ぐとすれども行やらで、其日の暮程に内山（いまの天理市）までぞ著せ給ける」（『太平記』巻第十八「先帝潜幸芳野事」）

だが、それではいつ追手が寄せるかもしれず安心できない。なんとかその夜のうちに吉野にたどりつこうとするが、あいにく月のない闇の夜。しかし奇瑞が生じた。「俄に春日山の上より金峯山の嶺まで、光物飛渡る勢ひに見へて、松明の如くなる光終夜天を耀し地を照しける間、行路分明に見へて（道もはっきり見えて）程なく夜の曙に、大和国賀名生と云所へぞ落著せ給ける」。だが賀名生の里は、皇居とするにはふさわしい所ではなかった。一行は、吉野の僧兵を直接たのむべく、使者を出す。それにこたえたのが、吉野の執行、宗信法印であった。

一行をうけいれるにあたって、一山の大衆を説得する宗信の演説は、古えの歴史と先蹤をふりかえる、『太平記』特有の論法である。ちなみに、先蹤・先例・範例・古典という言葉は、『太平記』の随所にみられるもので、『太平記』の思想を知る上では重要な手がかりといえる。

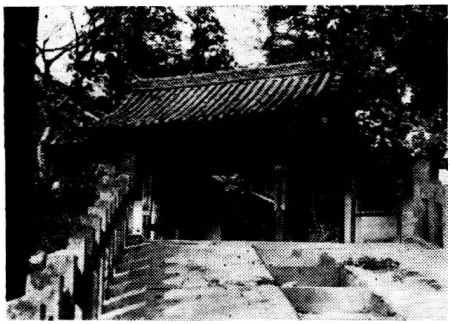
さて、宗信曰く、「古へ清見原の天皇（天武天皇のこと）、大友の皇子に襲れ、この所に幸成しも、程なく天下泰平を致る。其先蹤に付て今仙蹕を促るる事（行幸をうながされていること）、衆徒何ぞ異儀に及べきや。就中昨夜の光物臨幸の道を照す。是併（まったく）当山の鎮守蔵王権現・小守・勝手大明神、三種の神器を擁護し万乗の聖主を鎮衛し給ふ瑞光也。暫くも猶予あるべからず」（『太平記』巻第十八「先帝潜幸芳野事」）

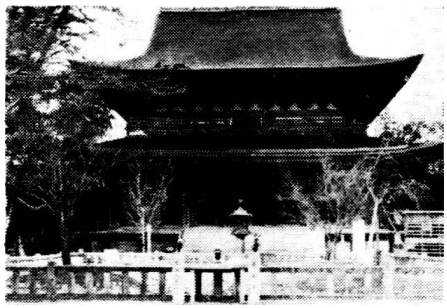
かくて、帝の吉野潜幸は成った。時に延元元年十二月二十八日のことである。そして、この日から二人の天皇が、朝廷を異にして、同時にならびたつという、いわゆる南北朝時代がはじまるのである。

吉野・吉水神社に残る「後醍醐天皇玉座の間」は、この時の行在所跡である。また南朝の皇居とされた金輪王寺をはじめ、吉野には南朝ゆかりの史跡が数多く点在する。

歌書よりも軍書に悲し吉野山

ところで、吉野潜幸に至るまでの天下の動きはどのようなものであったのか。年表ふうにみてみよう。





吉水神社は吉野山にあり、一時、南朝方の皇居があった（上・中）。下は蔵王堂。

吉水神社にある後醍醐天皇の玉座

南北朝動乱の発端は、後醍醐天皇に即していうならば、その天皇親政の理想にあった。文保二年（一三一八）、皇位にのぼった後醍醐天皇は、その三年後に院政を廃し、天皇親政の第一歩をふみだす。そして次の政治目標は北条氏の率いる幕府の打倒となる。だが正中元年（一三二四）九月には、この討幕計画がもれ、日野資朝・俊基らが捕えられた。いわゆる正中の変である。つづいて、元弘元年（一三三一）、ふたたび討幕計画が露顕し、この時は帝自身、笠置にのがれた。そこで、楠木正成がはじめて登場してくるのであるが、帝は結局とらえられ、幕府の推す光厳天皇に譲位の上、隠岐配流となった。元弘二年三月である。

しかし、畿内での大塔宮護良親王や楠木正成の活躍、それに鎌倉幕府の御家人である足利尊氏や新田義貞らの寝返りで、大勢は急転。後醍醐天皇は、名和長年にむかえられて隠岐より還幸。京都六波羅軍は敗れ、南北両探題も敗死した。そして元弘二年五月には、鎌倉の北条高時一族も討たれ、乱はいちおうの静まりをみせ、その翌年の三月には、年号が建武と改められ、いわゆる建武の中興が実現する。

だが、それも束の間、論功行賞の失敗、護良親王と足利尊氏の確執等から、都はふたたび戦場と化していく。そこで後醍醐天皇は、新田義貞らと手をくみ、尊氏を追い落とそうとはかる。だが、尊氏はいったん九州におちのびたものの、延元元年（一三三六）四月、十万の兵を整えて東上する。この大軍をむかえて楠木正成が湊川で

討死したのは、その年の五月。つづいて六月には名和長年も戦死。そして尊氏の上洛。一方、新田義貞らは、恒良親王等を奉じて北陸に去る。やむなく後醍醐天皇は比叡山から還幸するが、ただちに花山院に幽閉されてしまうのである。

このようにして、はじめに述べた吉野潜幸となり、南北両朝の対立となったのであるが、南朝方の北畠顕家や新田義貞もほどなく戦死し、後醍醐天皇にとって情勢は不利になる一方であった。そして、延元四年、帝自身、失意のうちに病を得て、やがて崩御。その後、天下は武家方を中心に展開されるが、足利氏もまた、兄・尊氏と弟・直義の骨肉相食む戦をくり返していくのである。

いうまでもなく、『太平記』は、この南北朝の動乱を五十年余にわたって書きつづったものである。作者は小島法師と伝えるが定かではない。ともあれ、『太平記』は、『平家物語』の琵琶法師と同じように、語り僧・太平記よみといわれる人々によって語りつがれ、全国にひろまり、今日みられる四十巻の大作となったのである。

そしてその間に、児嶋高徳の故事や、「落花の雪に踏迷ふ、片野の春の桜がり、紅葉の錦を衣て帰、嵐の山の秋の暮」ではじまる華麗な道行文、吉野城の村上義光の壮絶な死、大塔宮の最期や楠木正成の「千剣破城軍事」、あるいはその桜井の別れなど、数々のエピソードが独立して親しまれてきた。

従来、『太平記』の作者の立場については、宮方深重で、武家方には冷たいとされがちであったが、たとえば、宮方であろうが武家方であろうが、名や義に殉ずるを是とする点や、同一人物の評価でも、時と場所によって異なるなど、作者の立場は決して単純なものではない。それは、時に無原則と映るかもしれないが、むしろこの自己矛盾を内包した立場こそが、激動の時代をよく活写しえたのではなかろうか。問題は作者の立場をいかに構造的に理解するかにあるように思われる。また一方、戦のなかに本意なくも散っていく人間の哀しみに寄せる共感の深さは、『太平記』を、すぐれた文学にたかめている点といってよいであろう。

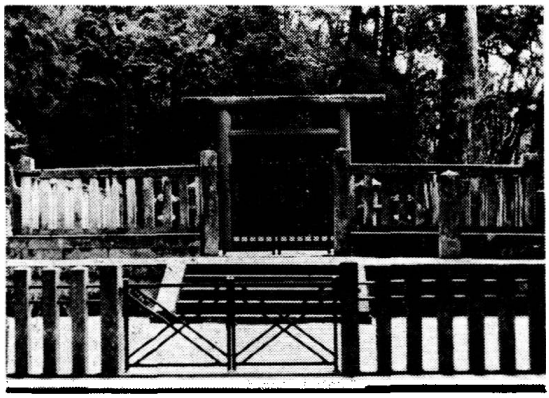
ところで、『太平記』には乱世にふさわしい種々の人間が登場し、さまざまな人間模様をおりなす。なかでも、

たとえば後醍醐天皇や楠木正成のように、明確な目的意識と強固な意志によって乱世を生きぬこうとした、いわば「意志的人間」とでも名づくべき一群の人々が目につく。それは、この時代にいたるまでは姿をみせることの少ないタイプの人々であり、『太平記』がはじめて描いてみせた人間類型といってもよいであろう。そしてそれは、現代のごとく、人生の目的を容易に見いだしえず、まして意志的に生きることのむつかしい時代にあっては、たしかに魅力ある群像と映る。

だが、『太平記』は、このような「意志的人間」を手ばなしで賛美し、肯定して描いてはいない。むしろ、『太平記』は「意志的人間」にまつわる一つの悲劇をさし示そうとしているように思われる。すなわち、目的が明確であればあるほど、また意志が強固であればあるほど、その人は、しばしば現実を無視し、いわれなき混乱を招来し、はては自らも自滅しがちであるということを。

たとえば、後醍醐天皇について、『太平記』は「御在位之間、内には三綱五常の儀を正して、周公孔子の道に順、外には万機百司の政（すべての政務）怠給ず、延喜天暦の跡を追れしかば、四海風を望で悦び、万民徳に帰して楽む。凡諸道の廃たるを興し、一事の善をも賞られしかば、寺社禅律の繁昌、爰に時を得、顕密儒道の碩才も、皆望を達せり。誠に天に受たる聖主、地に奉ぜる明君也と、其徳を称じ、其化に誇らぬ者は無りけり」と、その英明君主ぶりをたたえているが、一方では「惟恨らくは斉桓覇を行、楚人弓を遺しに、叡慮少き似たる事を」と批判してやまない。すなわち、斉の桓公が権謀・術数・武力で国を治めるという、聖王からみれば、まことに忌むべき覇道を行なったこと、また楚の恭王が、眼中には自国の楚人のことしかなく、もっと広く人民大衆に思いの及ばぬ狭量な人であったということ、これらの故事は、そのまま後醍醐天皇にもあてはまることだといってはばからないのである。だから、と『太平記』は書きつぐ、「是則草創は一天を幷といへども、守文は三載を越えざる所以也（すなわち、折角天下を併せながら、これを維持すること三年を越えなかった理由である）」。つまり、後醍醐天皇は覇道の人であると断じているのである。

また楠木正成に関する『太平記』の叙述は、あまりにも神秘のベールにつつまれすぎている。たとえば、正成がはじめて登場する条は、後醍醐天皇の夢告によっているし、その後の後醍醐天皇に対する忠誠路線を決める上



塔尾陵　後醍醐天皇の葬礼は天皇のかねての遺勅に従って、臨終の姿を変えず、北向きに葬られた。

では、天王寺の『未来記』披見が重要な役割を果たしている。また湊川での討死の後も、有名な大森彦七の段（『太平記』巻第二十三）に述べられているように、怨霊となって再登場してくる。

怨霊といえば、大塔宮護良親王もまた、怨霊となる。こうしてみるならば、『太平記』における「意志的人間」とは、怨霊の別名であるかのようである。

では、合理的計算に立脚しているはずの「意志的人間」が、かくも神秘的世界と相即して描かれているのは、いったい何を物語っているのであろうか。それは、すべて中世という時代に還元できる事柄なのであろうか。少なくともそれは、日本の精神風土において、意志的に生きるとはどういうことかをさし示す、すぐれて今日的な問題提起につながるように思われてならない。

吉野・如意輪寺。その本堂のうしろの林の中に、後醍醐天皇の墓、塔尾陵がある。この御陵は、常の御陵が南向きにつくられているのに反し、後醍醐天皇の意志によりわざと北向きにつくられた、いわゆる「北面の御陵」である。

『太平記』は、後醍醐天皇の崩御を次のように述べるが、それは、いかにも意志的人間の最期にふさわしいものといえよう。

「主上苦げなる御息を吐せ給て、『妻子珍宝及王位、臨命終時不随者、是如来の金言にして、平生朕が心に有し事なれば、秦穆公が三良を埋み、始皇帝の宝玉を随へし事、一も朕が心に取ず（死せば妻子珍宝も王位もつきしたがわないということは当然のことであり、私は秦の穆公や始皇帝のように、良臣や財宝を同道しようとは思わない）。只生々世々の妄念ともなるべきは、朝敵を悉亡して、四海を泰平ならしめんと思計也。朕則早世の後は、第七の宮を天子の位に即奉て、賢士忠臣事を謀り、義貞義助が忠功を賞して、子孫不義の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com